

## はじめに

天文教育普及研究会 会長 嶺重 慎（京都大学大学院理学研究科）

第27回天文教育研究会（2013年天文教育普及研究会年会）は、山口市で139名もの参加者を得て行われました。各1件の基調講演と招待講演、パネルディスカッション、33件の口頭発表、19枚のポスター発表からなるセッションに加え、「山口から宇宙へつながる」エクスカーションなど、地方色豊かなプログラムが組まれており、出席者、それぞれに十分満喫したことと思います。実行委員長の松尾さん、中国四国支部委員の山根さん、安藤さんほか実行委員の皆さん方、講演・司会をして頂いた方々、そして出席して下さった方々に厚く御礼申し上げます。

今回のメインテーマは「学校での天文教育を考える～連携の時代を迎えて」でありました。言うまでもなく、多くの子どもたちに系統的に教育が行われているという点において、小・中・高校における天文教育はきわめて重要であります。また、「連携」はあらゆるところに通用する現代日本のキーワードであり、学校と社会教育機関、地域団体などとの連携について、さまざまな方面から議論されました。

基調講演では、学習指導要領改善協力者で教科用図書検定審議会委員でもられる根岸潔氏を講師として迎え、学校での天文教育について、これまでの変遷と今後の方向性という観点からご講演をいただきました。招待講演では、国立天文台の家正則氏から、すばる望遠鏡による成果と共に望遠鏡開発にまつわる秘話をお話いただきました。続いて開かれたパネルディスカッションでは、5社の『地学基礎』執筆者が年会で勢揃いしたことを受け、地学基礎で何を学ばせるか、徹底討論が行われました。詳細は集録の各項目をご覧くださいのがよろしいかと思いますが、個人的な感想を記しておく、指導要領の内容が大きく変革して、10年前には夢であった「宇宙誕生」までも義務教育で学ぶことができるようになったことを感慨深く思いました。この変革には、本会も大きく貢献したという指摘もありました。今後は、物理などとも連携し、理科教育の再編に向けて、さらに議論が加速することでありましょう。

天文現象でいいますと、今年は「彗星」の当たり年であります。年会の後半、2日目夜の情報交換会（懇親会）から最終日には、「アイソン彗星」の話題で盛り上がりました。情報交換会といえば、今年は出席者が90名を超え、圧巻でした。会場のあちらこちらで、ふだんは交流することの少ない活動場所をおもちの方々が混じって、さまざまな話題で懇談がなされていたことが印象的でした。年会を契機とした入会者も、学生を中心に多数ありました。また、ふだんは粛々と進められる運営委員会から総会において、若手の本音にシニアが反発するといった場面があり、（いい意味で）聞き応えがありました。こうした突っ込んだ話し合いは、ぜひ継続していきたいものです。なお、私は参加できませんでしたが、エクスカーションは、KDDI 山口衛星通信センター（山口32m電波望遠鏡、KDDI パラボラ館）と仁保隕石落下地という、個人では訪れることの難しい場所を巡るツアーであり、好評であったと聞いています。

来年の年会は、関東地方（のどこか）で開催します。ここ数年、100名を超える出席があり、内容も、広がりや深みを増してきました。何よりも、鋭い「勢い」を強く感じます。この勢いを絶やすことなく、さらに盛り上げていきましょう。最後に、みなさま、支部会もよろしく。